

## 実践発表

よりよい人間関係づくりのための対人関係スキルの向上を目指して  
～実態把握をもとに組み立てた自立活動の指導・支援を通して～

宮崎市立広瀬小学校 教諭 白石 千絵

### 1 はじめに

本校勤務3年目である私は、以前、特別支援学校に勤務し、そこでの職員の児童生徒への関わり方や授業づくりなど、数々の実践に刺激を受け勉強する機会を得た。その後、小学校において自閉症・情緒障がい特別支援学級や通級指導教室の担当として、微力ではあるが、試行錯誤しながら実践を行ってきた。特に前任校では、宮崎県が進めるエリアサポート体制の宮崎地区の拠点校として、校内支援体制の在り方についても勉強をする機会を得た。今回の発表は、昨年度担当した自閉症・情緒障がい特別支援学級での取組についてまとめたものである。

### 2 研究の目的

本研究においては、自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍する自閉スペクトラム症とADHDの診断のある男児（A児）を対象としている。実態把握をもとにA児の個別の教育支援計画を作成し、年間指導計画に基づいて自立活動の時間を中心に指導・支援を行い、成功体験を積ませることでA児の対人関係スキルを向上させることを目的とした。また、望ましい学級経営がA児への環境調整の一つとなると考え、よりよい学級づくりも目的の一つとした。

### 3 研究の進め方

#### 1) 児童の実態

##### (1) 在籍学級及び交流学級での様子

(小学3年生時：通常の学級在籍)

- ・ 離席や不規則発言等の不適応行動が頻繁に出現したため、6月から自閉症・情緒障がい特別支援学級での支援を受けた。
- ・ 特別支援学級では、本児の学習段階に合った内容で、最後まで課題を遂行することができた。
- ・ 情緒が落ち着いている時は、間違いを指摘されても素直にやり直すことができ、クラスの他児との関係も良好であった。しかし、離席や不規則発言は頻度は減ったが継続していた。
- ・ 勝敗のある場面では感情的になり、机を蹴って教室から出ていこうとしたり、他児への暴言、暴力があったりした。

(小学4年生時：自閉症・情緒障がい特別支援学級在籍)

- ・ 新しい環境に適応することが難しく、離席や不適切発言、暴力等が増した。
  - ・ 周囲が気になり、活動に必要な学習用具を見失うことが増えた。
  - ・ 交流学級では、授業開始時間に間に合わないことはあるが離席はなく、学習は交流学級担任の言葉掛けにより成立している。交流学級内での他児との関係は良好とはいえないが、不適切発言や暴力等はなく、担任の指導・支援に対しても素直に聞き入れることができている。
- ※ 教育課程では、国語、算数、自立活動、道徳などの教科・領域（15時間）を特別支援学級で学習し、それ以外の14時間は交流学級で学習している。

##### (2) チェックシートによる観察

「子どもと教師のためのアセスメントシート」（宮崎市教育委員会）を基に、A児の行動を複数の職員で観察した結果、「不注意」、「多動性—衝動性」について、以下の項目が該当すると考えられた。

(不注意)

- ・ 学校での勉強で、細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。
- ・ 面と向かって話しかけられているのに、聞いてないように見える。
- ・ 指示に従えず、また仕事を最後までやり遂げない。
- ・ 学習課題や活動を順序立てて行うことが難しい。
- ・ 集中して努力を続けなければならない課題（学校の勉強や宿題など）を避ける。
- ・ 学習課題や活動に必要なものをなくしてしまう。
- ・ 気が散りやすい。

(多動性)

- ・ 手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。
- ・ 授業中や座っているべき時に席を離れてしまう。
- ・ きちんとしなければならない時に、過度に走り回ったりよじ登ったりする。
- ・ じっとしていない。または何かに駆り立てられるように活動する。

(衝動性)

- ・ 順番を待つのが難しい。
- ・ 他の人がしていることをさえぎったり、じゃましたりする。

(3) 尺度表による実態把握

実態把握をしていく中で、A 児は自己評価が低く、自分のよさや苦手な部分を理解していないのではないかと推測された。そこで、自己評価による尺度表とコミュニケーションスキルの定着を見る尺度表を用いてさらに実態を把握することにした。その結果、A 児は自分の気持ちをコントロールできず、さらに自分の気持ちを伝えられていないと感じていることが分かった。また、学習面でも苦手な課題に対しての拒否感があることが分かった。ソーシャルスキルに関しては、特別支援学級では自分の居場所と感じており、自分の思っているように振る舞うことで「集団行動をとるスキル」や「セルフコントロールスキル」が低くなり、緊張状態が続いている交流学級では、「仲間関係を築くスキル」や「コミュニケーションスキル」が発揮できていないのではないかと考えられた。

2) 研究の内容

(1) 学習場面での支援

- ・ 着席、聞き方、発言の仕方、質問の仕方に関する適切行動の強化、及び課題をやり遂げる行動と周囲に干渉しない行動の強化
- ・ ポイント制によるトークンの実施

(2) 対人関係スキルの向上を目指した自立活動の指導

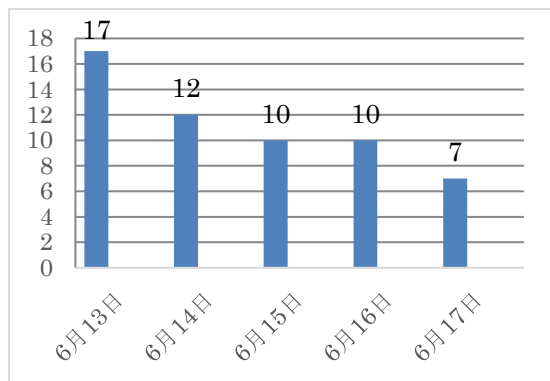
- ・ 児童の実態に沿った自立活動年間指導計画を作成
- ・ 自立活動の指導における「セルフコントロールスキル」、「仲間関係を築くスキル」、「コミュニケーションスキル」を中心とした対人関係スキルの向上

4 研究の実際

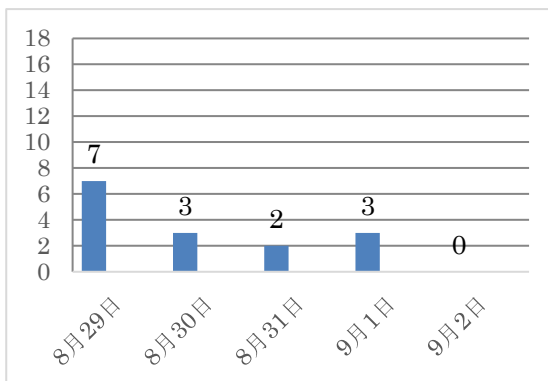
1) 学習場面での支援

授業中の離席や「〇〇は変な奴」等の不適切発言が頻繁になり、他の児童の「あ一分からん」等の急な不規則発言からも A 児が刺激を受けて、問題行動が増加したことから、着席、聞き方、発言、質問に関する不適切行動を観察した結果、6月は平均11回であった。そこで、年度当初から継続した取組と合わせて着席の仕方、聞き方、発言の仕方、質問の仕方に関する適切行

動の強化、及び課題をやり遂げる行動と周囲に干渉しない行動の強化をねらって、ポイント制によるトークンを8月から実施し、3月まで交流学級を中心に指導を継続した。



【グラフ1】 不適切行動の回数（6月）



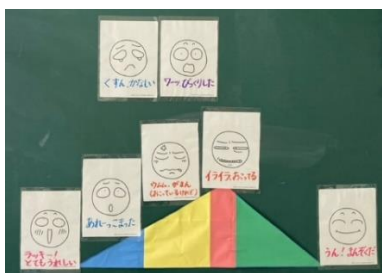
【グラフ2】 不適切行動の回数（8月～）

8月以降不適切行動が減少していったことから、口頭での注意や指示より、授業中の望ましい行動を視覚的に提示し、ポジティブな行動支援としての教師からの称賛やトークンを実施したことで、成功体験を獲得し意欲を高めたのではないかと考えられる。

## 2) 対人関係スキルの向上を目指した自立活動の指導

### (1) 失敗に終わったハートフルタイムにおける取組（7月）

自立活動の時間の指導においては、スキル学習を中心とした「ハートフルタイム」と、体作りや制作活動などを中心とした「アクティビティタイム」の二つの構成で取り組んだ。対人関係スキルの向上を目指すことから、授業は在籍児童4名と共に一斉指導の形態で進めた。2時間計画で行った7月の「ハートフルタイム」では、題材「イライラ虫を見つけたら」を行った。感情のコントロールができるようになるために、様々な場面での怒りの理由を振り返り、自分も周りの人も気持ちよく過ごせるための対処法について話し合った。



【写真1】 話し合い①（自分が怒った時、自分や周りの人はどんな気持ちになるのか）



【写真2】 場面①（勉強が思いどおりにできなくてイライラした時、どうすればよいのか）



【写真3】 場面②（負けることに我慢ができずイライラした時、どうすればよいのか）

授業においては、授業者が意図しないA児の言動が多く、級友や教師への批判が強くなり、授業の目的を達成することが難しい状況であった。さらに、深める段階で行うゲームにおいて、A児がイライラした感情を爆発させる場面があり、イライラしないように自分でゲームのルールを変えようとするなど新たな問題行動が見られ、授業で取り組んだ内容の般化も難しくなってきた。当初は、A児の問題行動の改善やスキルの般化への指導を「アクティビティタイム」の中で行おうと考えていたが、それ以上にA児の内面の育成とスキルの獲得の必要性を痛感した。そこで、A児の問題行動に対するアプローチを「ハートフルタイム」での指導の中で行うこととした。指導のテーマを「モンスターをやっつけよう」

とし、モンスター（問題行動）を第三者視点で見つめ直し、やっつけようとする取組（問題行動を解決する方法）をトークンで評価していくこととした。

## （2）ハートフルタイムにおける取組（11～2月）

11月から2月に実施した「ハートフルタイム」において、6時間計画で題材「モンスターをやっつけよう」を行った。学級に見られる「モンスター」を自立活動の時間等で紹介し、ねらいとする行動が現れる場面の動画をもとに、どんな「モンスター」がいるのか、やっつけるにはどんなことをすればいいのかを話し合い、ゲーム等を通して集団行動や相手との関わりに関するスキルを練習し、定着を図った。授業の中でスキルの獲得について確認することは難しかったが、日常生活の中での自己評価カードや日頃の振り返りによる繰り返しの指導・支援により、スキルの向上が見られた。

## 5 成果と課題

### 〈成果〉

- ・ 問題行動を第三者視点で考え直したことで、それぞれの問題行動の意味やその時の気持ちを言葉で伝えることが増え、状況に応じて攻略法を確認したことで、どんな行動をとればよいのかが分かり、少しずつ問題行動が減少していった。
- ・ 他者と自分の関係に気付く等の自己理解が進み、仲間関係スキルが向上したことで、自閉症・情緒障がい特別支援学級及び交流学級で、よりよい人間関係づくりができるようになってきている。
- ・ 実態把握を行い、個別の教育支援計画、個別の指導計画等を作成し、個に応じた自立活動の年間指導計画を立て、年度当初から計画的に自立活動に取り組んだことは、自閉症・情緒障がい特別支援学級の学級づくりを進めていく上で効果的であった。

### 〈課題〉

- ・ ねらいとする行動の出現する場面を動画で提示し、問題行動を話し合う場面においては、異学年での学習形態では考えを深めることが難しかった。問題行動を自分のこととして捉え自己評価し、スキルの定着を図る上では、朝の時間などの合間の時間を活用しながら、個別での自立活動の時間の指導も計画的に進めていく必要がある。
- ・ 自分の中の問題を見付けていく段階において、他人の良くない行動には目が向くが、自分のことは気付きにくい傾向があった。学級づくりを効果的に進めていく上では、共通の問題行動を学級のめあてとして取り組む中で自分のこととして考えさせ、般化のために、時間設定や日常的な指導の工夫を行っていく必要がある。

### 【参考文献】

上野一彦、岡田智 実践ソーシャルスキルマニュアル、明治図書  
小貫悟、イトケン太郎 子どもが思わず動き出す！ソーシャルスキル  
モンスター（東洋館出版社）  
小貫悟、イトケン太郎 子ども・クラスが変わる！ソーシャルスキル  
ポスター（東洋館出版社）

埼玉県立けやき特別支援学校伊奈分校、国立特別支援教育総合研究所  
尺度表「自分メーター」  
佐田東彰 強い反抗性を示す ADHD 児の問題行動と学級全体の問題行動  
に対する支援—クラスワイドな支援と個別支援を組み合わせた支援家  
庭の妥当性—、LD 研究 第26巻 第2号